

Title	鴻池善右衛門(宮本又次著, 吉川弘文館刊行, 人物叢書第三冊)
Sub Title	
Author	中井, 信彦(Nakai, Nobuhiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1959
Jtitle	史学 Vol.32, No.1 (1959. 4) ,p.115- 116
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19590400-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

鴻池善右衛門

（宮本又次著
吉川弘文館刊行
人物業書第三冊）

戦後における日本史研究の長足の進歩にはもとより幾つかの原
因を擧げることができるが、特に近世史については、従来秘藏さ
れたまま學界の利用に供されることのなかつた史料が公にされ始
めたことに、一つの有力な素因を認めることができる。舊華族
家・舊家・富豪等が自家の古い記録や文書を保存し續けてくれた
ことは、その理由が何であつたにもせよ、感謝されてよいことと
あり、これを活用して歴史に新しい光を投ずることは、史家に課
された任務であるといえる。

山中鹿之助の後裔と傳えられる鴻池家は、わが國における最も
古い富家の一つである。天下の台所と稱された商業都市大阪隨一
の、というよりも、むしろ江戸時代における最大の町人であつた。
従つて従來とても近世の經濟史を叙述するに當つては、必ず同家
のことに觸れるのを常としたけれども、それは同家が刊行された
「鴻池年表」と、手代草間伊助の編纂に成る「鴻池新田開發事略」
及び攝陽落穂集その他の雜書に據るにすぎず、同家の古文書その
ものに依據したものはなかつた。同家でも高梨光司氏らに依頼し
て家史編纂の業をおこされたことがあつたが、公刊には至らな

つたのである。

戦後、同家の門をたゞいて古文書調査の端をひらかれたのは、
野村兼太郎教授を主宰者として全國的に展開された近世庶民史料
調査の委員としての堀江保藏・宮本又次兩教授であつた。また同
家の史料を活かした研究の最初のもものは、人文地理學の立場から、
鴻池新田を調べられた池浦正春氏のそれであつたと思う。その後、
筆者も昭和三十年に同家の御好意によつて所藏史料を自由に採訪
する便を與えられ、約一週間、新田會所土藏に收められた古文書
を調査させていたゞき、相當量の史料寫眞を撮つて歸つたが、生
來の怠慢なる、それを活用したところは極く一小部分に過ぎなかつた。その後、有賀喜左衛門教授が、町人社會の研究の一環として、同家の家憲を紹介される等、鴻池家文書の調査は漸をおつて
擴げられていつた。しかし、それらはみな巨商鴻池家の歴史の一
端に光をあてたに過ぎず、その全貌は未知のままに委ねられてき
たのである。

このたび、商業史の權威宮本又次教授によつて物された「鴻池
善右衛門」は、初めて公にされた鴻池家の歴史の概説である。人
物叢書の一冊として出されたものであるが、個人の傳記ではなく
して、いわば家の傳記である。遠祖山中鹿之助幸盛に筆をおこし
て、戦後の農地解放にまで及ぶ四百年の同家の傳記が、始祖新六
（幸元）と三代善右衛門（宗利）に重點をすえて、要領よく概説
されている。

攝州伊丹在鴻池村における酒造業と、その江戸廻漕に始まる同家の海運業の發展、ついで兩替業の開始と大名貸の増大、及び鴻池新田二〇〇町歩の開發を中心とする慶長から享保までの經營史は、それ以後の扶持米一萬石と傳えられるほど大規模な大名貸と共に、江戸時代の經濟史上に重要な史實を提供するものである。本書は、それほど永い時間をかけた調査を経て書かれたものではないと推測されるが、著者の豊富な蓄積と精力的な仕事振りに支えられて、よく全貌を把握していると思われる。

しかし、鴻池家に残っている膨大な古文書が、本書によつて概観された個々の部分について、更に詳細な史實を語つてくれることは明らかである。著者が主宰される大阪大學の經濟史研究室は、その全スタッフを擧げて同家文書の調査研究を續けておられると聞く。單なる經濟史の見地からだけでなく、大商家の組織や主人のパスナリティにまで目を及ぼしておられる著者のすぐれた指導が、刮目すべき成果を生みだされることを信じつゝ、その結實の日の速かならんことを希うものである。

因みに、近時富豪の歴史がつぎつぎに公にされつゝあることは、誠に悦ばしい。特に住友家の「泉屋叢考」が既刊十冊を數えて、優れた史料を多く提供してくれている。それこれを思い合わせるに、筆者が多年事に携わつてきた三井家の歴史も、遠からずその概説だけでも公にすべき時がきているようである。(中井信彦)

キリシタン大名

(吉田小五郎著)
日本歴史新書
至文堂刊

本書公刊以來、すでに四年有餘半。近時續篇發刊の計畫ありとも聞く。著者の講筵に列した者にとり、本書を繙く時、今なほ感慨を禁じ得ないものがある。多少時期遅しの譏を免れないが、敢て惡筆を省みず内容紹介を試みた所以である。

本書の題名は表記の如く「キリシタン大名」であるが、著者はシュタイシエン師の故智に倣ひ、叙述をキリスト教を信奉する大名に限定せず、ザビエル開教から島原の亂に至る凡そ九十年、その前後を合せて約百年間のキリシタン興廢の歴史をここに描き出している。

その内容構成を見るに、序にかへて。興隆期一、偉大なる先驅者。二、傳道と貿易。三、京畿の開教。四、信長とキリシタン。衰退期一、秀吉と禁教令。二、二十六聖人の殉教。三、徳川氏の祖法。四、鎖國とその前後。五、キリシタンの傳道費。附録、奇僧マストリリの一生。あとがき。となつてゐる。以下内容につき、簡単に記してみると、「序にかへて」には本書の表題でもある「キリシタン大名」といふ言葉の考證が先づ行はれ、Fidalgo christão, Seigneur chrestein, Christian lord 等の西洋語からシュタイシエン師が使つたのがその最初であらうと述べ、次いで日本側の「吉利支丹」「切支丹」の文字の使用の推移を説い